［令和７(2025)年度　総括評価表］

徳島県立阿南支援学校

自　己　評　価						学校関係者評価	次年度への課題と
重点課題	担当部・課	重点目標	評価指標と活動計画	評　価		学校関係者の意見	今後の改善方策
多様性を育むキャリア教育の展開	中学部	（全校レベル） Ⅰ)児童生徒及び保護者の教育的ニーズに応じた教育活動の実現 Ⅱ)卒業後を見据え，それぞれの成長と多様な学びに応じた教育活動の充実 Ⅲ)特別支援学校教員としての専門性の向上 ＜下位組織レベル＞ ①生徒の中心課題の把握とそれに基づく個々の適切な指導支援を図る	評価指標 ①学部内のアンケートにおいて昨年度末に実施した結果から各項目において肯定的な結果が前年度より５%以上増える。 活動計画 ①-1自立活動の時間における指導の取り組みの中で個別の中心課題を抽出し授業づくりを進める。 ①-２自立活動の学習活動を共有し、担任や教科担任が他の教科等で活用できるシステムを検討する。 ①-３コンサルテーションおよびスーパーバイザーを活用して行う。 ①-４年度末に教員アンケートを実施し、Ｒ６年度結果からの比較を確認するとともに次年度への課題と改善策を検討する。	評価指標の達成度 ①自立活動の研究と関連付けて行った。各項目において前年度より肯定的な結果が５%以上増えた。 活動計画の実施状況 ①－１生徒全員について中心的課題を抽出し、目標設定を行った。「自立活動シート」を考案し、個別の指導計画に関連付けて授業作りを行った。 ①－２「自立活動シート」を活用して授業グループごとにミーティングを行ったり、ミーティング内容の報告会をもったりした。またTeams等を活用して動画や指導計画に関する情報共有も行った。 ①－３鳴門教育大学教授によるコンサルテーションを活用して行った。 ①－４学部会にて達成度を確認し、次年度の課題と改善点について協議した。	総　合　評　価 （評定） A （所見） ①学部研究として実施したことで、自立活動の時間における指導に関する授業システムが構築されつつある。 またこのシステムを運用していくことで教員の専門性が高まりにつながった。	・自立活動の実践研究に講師として携わっているが、こちらの方が勉強にもなる。次年度も継続して研究を進めていきましょう。	①学部研修として継続して取り組みを行う。鳴門教育大学教授とのコンサルテーションを継続する。 ②研究結果を校内にて周知を行い、他学部へ般化を検討する。
	教務部	（全校レベル） Ⅰ)児童生徒及び保護者の教育的ニーズに応じた教育活動の実現 Ⅱ)卒業後を見据え，それぞれの成長と多様な学びに応じた教育活動の充実 Ⅲ)特別支援学校教員としての専門性の向上 ＜下位組織レベル＞ ①個別の指導計画作成において、児童生徒の実態や保護者のニーズ、生徒のニーズ等が反映され、見やすい書式となるよう見直し・検討を行う。	評価指標 ①個別の指導計画推進委員会を年間３回実施し、現在の書式の見直しを行う。来年度、使用できることを目標とし、今年度中に新書式を作成する。 活動計画 ①-１個別の指導計画推進委員会を年間３回設定する。 ①-２教務課会において、書式の見直しを行い、改訂案について検討する。 ①-３課会で検討した書式案を推進委員会で検討する。 ①-４第３回の推進委員会で承認された書式について、部会や職員会議で周知する。	評価指標の達成度 ①年間３回(６月・10月・１月)、個別の指導計画推進委員会を実施することができた。現在使用している個別の指導計画の書式について、推進委員会のメンバーで検討を行い、新書式を作成することができた。 活動計画の実施状況 ①-１年度初めに個別の指導計画推進委員会を年間３回設定し、予定通り実施することができた。 ①-２教務課会において、書式の見直しを行い、改訂案について検討することができた。 ①-３課会で検討した書式案を推進委員会で提案し、検討することができた。 ①-４第３回の推進委員会で承認された書式等について、２月の職員会議で報告し、周知することができた。	総　合　評　価 （評定） A （所見） ①前年度末に年間３回の推進委員会の日時を設定したことで、計画的にすすめることができた。またそれぞれの回での検討内容についても計画的にすすめたことで、第３回の会議で、新年度からの使用のめどがついた。会議では、現在使用している書式について見直しする箇所について説明し、改定案を提示してメリットやデメリット等について検討することができた。２月の職員会議で推進委員会の報告を行い、全体周知をはかることができた。	・色々と見直しがされていることは良い。	①昨年度から取り組む予定であった個別の指導計画の様式の見直しについて、今年度推進委員会を実施して、検討を行い、見直しができたことは大きな成果であった。次年度は、学校や子どもたちについて校外の方にも知っていただける機会を設定しようと検討している。久しぶりの実施のため、うまくいかないこともあるかもしれないが、今後継続して実施できるような機会にしたいと考えている。
	研究課	（全校レベル） Ⅰ)児童生徒及び保護者の教育的ニーズに応じた教育活動の実現 Ⅱ)卒業後を見据え，それぞれの成長と多様な学びに応じた教育活動の充実 Ⅲ)特別支援学校教員としての専門性の向上 ＜下位組織レベル＞ ①本校の多様なニーズに応じた校内夏季研修会「あなんフェス」を企画・運営する。 ②個別のニーズに適切に対応するために全学部でコンサルテーションを活用する。 ③自立活動の授業の充実を図るために、教員が活用しやすいデータベースを作成する。	評価指標 ①教員への事前アンケートの結果をもとにした研修会を10以上開催する。 ② 特別支援学校コンサルテーションを活用し、ニーズへの対応に活かすことができたとアンケートで回答した教員が全体の90%以上になる。 ③グループの自立活動の実践について22グループのデータをデータベースに蓄積する。 活動計画 ①－１　教員への事前アンケートを実施し、多様なニーズに応じた研修会を企画・運営する。 ①－２　より専門性を高めるために教員が講師となって研修会を実施する。 ②－１　研究課員の中から担当リーダーを配置し、コンサルテーション実施にあたって担任や担当をサポートする。 ②－２　コンサルテーションの内容を教員間で共有するために、各学部で研修会や報告会を実施する。 ③－１　探しやすく使いやすいデータベースについて研究課で検討し、これまでのデータを用いてデータベースを作成する。 ③－２　全グループの自立活動の「年間報告」と「学習指導略案」をデータに残す。	評価指標の達成度 ①教員への事前アンケートをもとに研修のニーズを把握し、校内夏季研修会「あなんフェス」を22講座開催した。 ②コンサルテーションを活用した教員への事後アンケートでは、小学部100%、中学部94%、高等部100%の教員が 、児童生徒それぞれの指導支援に活かすことができたと回答した。 ③グループの自立活動の実践について、年間報告と指導略案のデータを小学部８グループ、中学部７グループ、高等部７グループの計22グループ分蓄積した。 活動計画の実施状況 ①－１　全教員対象に６月に事前アンケートを実施し、ニーズを把握した上で、企画・運営した。意見をもとに、施設見学や高等部生徒を講師とした講座など新たな研修形態も取り入れた。 ②－１　研究課員の中から担当リーダーを配置し、各学部のコンサルテーション実施にあたって担任や担当をサポートする体制をとった。 ②－２　コンサルテーションの中で研修会を実施したり、事後に報告会を実施したりして、専門家からの助言について学部内で情報共有をした。また、コンサルテーションによっては、対象学部以外の教員にも参加を呼びかけ、多くの教員にとっての研修の機会となるようにした。 ③－１　自立活動の授業に活かすことができるよう、使いやすいデータベースのシステムについて意見を出し合い、データベースを作成した。（３月公開予定） ③－２　ほぼ全てのグループの自立活動の「年間報告」と「学習指導略案」のデータを作成し残した。（高等部職業基礎コースはグループを細分化して授業をしたため、そのうちの３グループのデータを残すこととした。）	総　合　評　価 （評定） A （所見） ①教員のニーズをもとに、研修内容や広報の仕方などについて工夫をし、企画・運営をした。多くの参加があり、全体を通してのべ584名の教員が参加した。事後アンケートでは、参加した教員の100%が「とてもよかった」「よかった」と回答した。講師をした教員からも、専門性の維持向上の観点からポジティブな意見を得た。また、冬季休業前後にも「冬のあなんフェス」を実施し、参加した教員の満足度は100%であった。 ②全学部でコンサルテーションを活用した。小学部では、低学年を対象にAI-PACを活用した取組を行った。グループ検討会も実施し、気軽に相談したり検討したりできる体制をとった。中学部では、生徒の個別事例と、自立活動を主とした実践研究に取り組んだ。高等部でも、自立活動の授業改善を通して教員の専門性を高めた。そして、取組や専門家の助言については、それぞれの学部や、学部を限定せず情報共有する機会を設定した。 ③活用してみたいと思えるよう「あなん自立Labo」というネーミングでデータベースを作成した。自立活動の「年間報告」と「学習指導略案」を学習指導要領の６区分から検索できるようにした。特に来年度、授業を計画する際に活用できるよう整えている。	・「あなんフェス」のネーミングが親しみやすくて素晴らしい。	①新たに受けたい研修の要望や、講師としての自薦、研修内容の提案など、研究課外からも積極的な意見が出ている。今後も教員の期待や多様なニーズに応えられるよう、企画・運営していきたい。 ②コンサルテーションを活用する教員に対してのサポートの仕方と、学部内の全教員に共有を図る取り組みについて検討を重ね、コンサルテーションをより多くの教員にとって意義のあるものとしたい。 ③データベースとして充実させるようデータの蓄積を継続したい。また、来年度は、活用のしやすさや改善点など教員の意見を聞く必要があると考える。

＊　「評定」の基準　Ａ：十分達成できた　　Ｂ：概ね達成できた　　Ｃ：達成できなかった